

2024年度
国語

2024年2月1日実施
獣医学部 動物資源科学科，生物環境科学科

受験番号		氏名	
------	--	----	--

【注 意 事 項】

1. 試験監督による解答始めの指示があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分です。
3. この問題冊子は1ページから29ページまであります。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の所定欄に記入しなさい。
5. 解答は所定欄に濃くはっきりとマークしなさい。その際，ボールペン・サインペン・万年筆等は使用してはならない。その他マークの仕方に関しては，解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。
6. 試験監督の指示により，解答用紙(マークシート)に**氏名(フリガナ)**および**受験番号**を記入し，さらに**受験番号**および**志望学科**をマークしなさい。
7. 試験監督の指示により，問題冊子にも**受験番号**および**氏名**を記入しなさい。
8. 解答用紙(マークシート)は折り曲げたり，メモやチェック等で汚したりしないように注意しなさい。
9. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は，手を高く挙げて試験監督に知らせなさい。
10. 試験終了後，問題冊子と解答用紙(マークシート)はともに机上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。

(余 白)

I 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

よく知られるように、^(注1)〈ASIMO〉やそのプロトタイプである二足歩行ロボット〈P2〉の開発では、その歩行モードである〈静歩行〉から〈動歩行〉へのシフトが大きな⁽¹⁾ターニングポイントになったという。

それまでのロボットの歩き方といえば、なにかキカイキカイしていて、とてもA。身体全体のバランスを崩さないように、軸足となる足底内に重心を確保したまま、もう片方の足をそーっと前に進めることをする。その重心の移動を確認できると、もう片方の足をそーっと前に進めることをくりかえす。薄氷の上を、ビクビクしながら歩くような感覚だろうか。

一方で〈ASIMO〉などで実現した〈動歩行モード〉とは、どのようなものなのだろう。なにげなく一步を踏みだそうするとき、わずかに勢い余ってか、その重心は軸足となっている足底からすこし外れてしまう。すこし前のめりになって、倒れこむ感じだろう。しかし⁽²⁾幸いなことに、その踏みだした一步は地面からの反力を借りて、どうにか全体として動的なバランスを維持している。地面に対する〈委ね〉とその地面からの〈支え〉との動的なカップリングによって、なにげない歩行というものを生みだしているのである。

これは部屋の壁に果敢にぶつかっていく^(注2)お掃除ロボットの姿とも重なる。先にも、「わたしたちは街のなかを歩くと同時に、その街がわたしたちを歩かせている」と述べたけれど、「わたしたちは地面の上を歩くと同時に、その地面がわたしたちを歩かせている」ともいえる。その「一步」は行為者のなかに閉じて、自己完結しているのではなく、むしろ外に対して開いているのだ。

この地面からの〈支え〉をBして一步を繰り返すとき、ある種の投機的な行為がなされていることに注意したい。わずかなけれどドキドキした感じをとまなうのである。この「どうなってしまうかわからないけれど……」という感覚をとまないながら、他に委ねるような振る舞いのことを、ここでは〈投機的な振る舞い (entrusting behavior)〉と呼び、これを支える地面のような働きを〈グラウンディング (grounding)〉と呼ぶことにしたい。

よくよく考えるならば、いつの間にか地面という受け手は、〈なにげない一步〉という意味や価値を生みだす主役となっている。「もうこれ以上は進めませんよ」という、お掃除ロボットに方向転換を促す部屋の壁の働きも一種の〈グラウンディング〉にとらえるなら、「部屋を⁽³⁾まっくすべんなくお掃除する」という行為も、この〈委ねる〉⇔〈支える〉のカップリングによって生みだされたものだろう。その壁は自分に委ねられた行為を受け止め、それを意味づけし、そして新たな方向づけをおこなっているのである。

でも、どういうわけで〈歩行〉という行為は、⁽³⁾こころした危なっかしい行為方略を選択することになってしまったのか。誰でも、「自分の身

体なのだから、誰にも委ねることなく、自分のなかだけできちんと律していきたい」「自分の行為の意味なのだから、自分で最後まで責任を持ちたい」と思う。歩くということくらい、一人でできないものなのか……、と。しかし、Xとすると、その身体を硬くしたまま、「慎重に、慎重に……」とギクシャクとした〈静歩行〉になってしまうようなのだ。

乳幼児も歩くことを覚える過程で、なんらかの拍子に「一人でなんとか……」とのこだわりを捨てる瞬間があるのだろう。心もとない歩きのなかで、ときにはバランスを崩してしまうことも。そんなとき、図らずも地面からの反力を得て、そのバランスを保つことができた。そうしたことをくりかえすなかで、いつの間にか地面を味方につけつつ、スマートに歩くという行為方略を自分のものにしたのである。

自らの内なる視点から、その行為を繰り返そうとするとき、その意味や価値を完全には知り得ない。このような身体に内在する制約のことを、ここでは〈行為の意味の不定さ (indeterminacy)〉と呼ぶことにしたい。なにげない一歩に限らず、わたしたちの行為の多くは、自らの「意味の不定さ」を悟りながら、地面などの環境に自らの行為の意味を委ねようとする。いわゆる「小さなドキドキ」というのは、こうしたところから生まれるものなのだろう。〈ASIMO〉の〈動歩行〉に感じたドキドキ感というのも、その意味の不定さを内包する身体と地面との 拮抗し、関係性のなかからたち現れたものなのだ。

「4」〈ASIMO〉とわたしたちのあいだにある共通したもの？ その身体的な共通基盤とは？、そうしたことを考えるうえで、単に「人型である」「二足歩行をする」というだけでなく、この「ドキドキしつつも、地面を味方にして歩く」という行動様式やその背後にある〈不完結さ〉にも目を向けておきたい。わたしたちのお掃除ロボットに対する共感も、「周囲を味方につけながら……」という、〈委ねる〉 ⇨ 〈支える〉の行動様式に起因しているようなのである。

薄氷を C ような〈静歩行〉から〈動歩行〉へのシフトというのは、そこで歩行モードを変えただけではない。地面に対する信頼を見出しながら、より効率的な移動の手段を手に入れていることに注意したい。スマートなだけではなく、ちよつとエコなのである。

わずかな坂道を下るときなど、すこし身体の力を抜くようにして、地面に一歩を委ねてみる。するとオモチャのロボットがその傾斜をそのままトコトコと下るように、脱力したまま歩くことができる。これは 図 パッシブウォーク、つまり受動歩行と呼ばれているもので、傾斜から得られる位置エネルギーを歩行運動に利用するため、「歩く」ための特別な動力を必要としない。

平地での〈動歩行〉は、前方へと移動するためのエネルギーは必要なのだけれど、このパッシブウォークの動作に近く、とても省力的なのである。一方、一つひとつ重心の移動を確認しつつ慎重に歩を進める〈静歩行〉では、各所にエネルギーの無駄が発生し、こうしたエコな歩き方

とはならない。自然界では、こうしたチープで、かつエコな方略を選びとっているようなのである。

それと〈ASIMO〉の研究開発のなかで印象的であったのは、動歩行モードの安定化に向け、その後日談として語られた「倒れそうになる動作をむしろ歩行に生かす」という考えである。

〈動歩行〉をおこなうとき、地面に対して「一歩」を委ね、その地面からの反力を利用しながら動的なバランスを維持するというのは理屈ではわかる。けれども歩くたびに硬い地面に足底がゴツンゴツンとぶつかる感じがして、なにか柔軟さに欠ける。不整地などにあっては、すぐにバランスを崩して倒れてしまうことだろう。普通は、「じゃ、肉球のようなものをつけて、その衝撃を吸収してはどうか」「上体の腕の動きを利用してバランスを取ってみたらどうか」など、なんとか上体のバランスを維持しようと、身体を硬くして必死になる。そこには「Y」というこだわりがまだ残されているのだ。

では、「倒れそうになる動作をむしろ歩行に生かす」とはどういうことだろう。発想のベースにあるのは、「倒れないようになんとか踏みとどまる」のが大変ならば、むしろ「倒れてしまうことを前提に、そのバランスが崩れたら、それを修復すればよいのではないか」という楽観的なスタンスであった。

前方に倒れそうときには、むしろ前に強く踏み込むことで、その倒れそうな上体を起こす。これは倒立振子の原理そのものである。手のひらの上で傘を立ててバランスを取ろうとするときも、無意識に同じような動作をしている。すこし前のめりとなって、歩行を速める感じなのだ。たぶん〈ASIMO〉はドキドキしながら歩くことはないだろう。けれども、一歩一歩とすこし腰を屈める^{かが}ように、その身体を半ば地面に委ねるように歩く、勢い余って前のめりになっても、「おっとと……」と歩調を速めながら上体のバランスを整える。そんな〈ASIMO〉の姿はともひょうきんに思えるし、⁽⁶⁾ その姿に思わず自分の身体を重ねてしまうのである。

(岡田美智男『〈弱いロボット〉の思考 わたし・身体・コミュニケーション』講談社)

(注1) 〈ASIMO〉——本田技研工業株式会社が開発した、世界初の本格的な二足歩行ロボット。〈P2〉はその前身である。

(注2) お掃除ロボット——筆者は本文に先立つ部分で、部屋の壁にぶつかりながらも掃除をする〈弱いロボット〉に言及し、そのオープンなシステムは人間にも共通していると指摘している。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

1

 ～

3

。

(ア) まんべんなく

1

- ① 滞りなくなめらかに
- ② 丁寧にじっくりと
- ③ つねに一定の速度で
- ④ いつまでもずっと
- ⑤ くまなく一様に

(イ) 図らずも

2

- ① 思いがけないことに
- ② 知らないところで
- ③ 見違えるように
- ④ 期待は裏切られて
- ⑤ あっという間に

(ウ) 拮抗した

3

- ① 一体となった
- ② 張り合った
- ③ ひっくり返った
- ④ 入れ替わった
- ⑤ 寄り添った

問 2 空欄 A C を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 4 ～ 6 。

A	4	①	つまらない	②	ぎこちない	③	あじけない	④	あじけない	⑤	せわしない
B	5	①	肯定	②	選定	③	固定	④	予定	⑤	指定
C	6	①	溶かす	②	貫く	③	踏む	④	沈める	⑤	割る

問 3 傍線部(1)「ターニングポイント」を言い換えた言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

- ① 出発点
- ② 結節点
- ③ 転換点
- ④ 一致点
- ⑤ 着眼点

問 4 傍線部(2)「幸いなことに」とあるが、筆者は何を幸いだと思っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

- ① 地面からの反力を用いることで〈動歩行〉を実現するロボットは、歩くために特別な労力を必要としないため、エコでもあること。
- ② お掃除ロボットや二足歩行ロボットにおいては、〈静歩行〉から〈動歩行〉への歩行モードのシフトがスムーズに行われていること。
- ③ 〈動歩行モード〉を実現したロボットは、倒れそうになるようなことがあっても、自己完結的に問題を解決することができること。
- ④ 二足歩行ロボットが一步を踏み出そうとしたときにバランスを崩しても、身体全体を支える力を地面から得て、倒れずに済んでいること。
- ⑤ 〈ASIMO〉などのロボットは、最初の一步を踏み出すことに難点はあるものの、〈動歩行〉に移れば難なく歩を進めていけること。

問 5 傍線部(3)「こうした危なっかしい行為方略」とは、具体的にどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① 地面に身体全体を〈委ねる〉ようなかたちでまず一步を踏みだし、その一步に対して反力が働くようになってからは、自らの行為の意味を理解し、方向づけもするようになるという方略。
- ② なにげなく一步を踏み出した時点では、うまく歩ける保証はないが、その踏み出した一步に対して地面から〈支え〉を得ることによって全身のバランスを取り、歩行を実現するという方略。
- ③ 見ている者をドキドキさせるほどの危うい姿勢で最初の一步を踏みだし、その後、地面から得られる投機的な力を借りることによって、どうにか歩行を持続させていくという方略。
- ④ 最初は「どうなってしまうのかわからないけれど……」といった感じで〈静歩行〉から始め、地面の〈グラウンディング〉を得たのちは、少しずつ〈動歩行〉へとシフトしていくという方略。
- ⑤ どの方向に進んだらいいのかわからないという感覚をともないながら、とりあえず一步を踏みだし、地面や壁、周囲の人間の力を借りることによって一定の方向に歩いて行くという方略。

問 6 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① 自らのなかで閉じたかたちで〈歩行〉という行為を生みだそう
- ② 自分の力だけで〈動歩行〉から〈静歩行〉へとシフトしよう
- ③ 外部にある何ものかに身を委ねて最初の一步を踏みだそう
- ④ 地面から返ってくる力をできるだけ自分の〈歩行〉に生かそう
- ⑤ 自分が今どこに向かおうとしているのかを逐一確認しよう

問 7 傍線部(4)「〈ASIMO〉とわたしたちのあいだにある共通したものは？」とあるが、筆者はどのような点が共通していると考えている

か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① 内在する身体的制約があり、行為を自分だけで完結することができないため、環境の力を借りながら行為を繰り返すことになるという点。
- ② 〈行為の意味の不定さ〉があるため、環境を味方につけない限りは、自らの行為の意味を完結したものにすることができないという点。
- ③ 人型で二足歩行をするというだけでなく、エネルギーの消費を抑えるために周囲を味方につけ、少しずつ〈動歩行〉にシフトするという点。
- ④ 自分では自らの行為の意味を十分に理解することができないため、結果的に、行為が完結しないまま終わってしまいがちであるという点。
- ⑤ 身体に内在する制約があるため、自分でできることには限りがあるので、行為の一部を周囲に代行してもらわざるを得ないという点。

問 8 傍線部(5)「パッシブウォーク」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① すこし前のめりになって地面に一步を委ね、そこから得られる反力を利用しながら歩くという方法であり、「どうなってしまうのかわからないけれど……」という感覚をとまなうという点で投機的である。
- ② ゆるやかな坂道を下るときなどに生じる位置エネルギーをうまく利用した歩き方であり、何か特別な動力を必要とせず、脱力したまま歩くことができるという意味で効率的であり、またエコでもある。
- ③ オモチャのロボットがわずかな傾斜をトコトコと下っていくように、重心を少しずつ前に移しつつ進んでいく歩き方であり、特に力を入れる必要がなく受動的であるという点では〈静歩行〉と共通している。
- ④ 〈ASIMO〉の二足歩行に見られるような受動歩行であり、地面から得られる反作用を動力に変え、一つひとつ重心を移動させながら歩みを進めるので動きはぎこちなくなるが、省力的ではある。
- ⑤ 地面や壁などの周囲にあるものを味方につけ、そこから得られるエネルギーを利用しながら前方へと移動していく動的な歩き方であり、お掃除ロボットや〈ASIMO〉においてはじめて実現が可能となった。

問 9 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 13。

- ① 何とか倒れないように、味方になってくれるものを探さないといけない……
- ② 自分の力では起き上がることができないので、誰か助けてください……
- ③ 倒れないように、なんとか自らのなかでバランスを取り戻さなければ……
- ④ 地面をうまく使って倒れないようにするには、どうしたらいいのだろう……
- ⑤ まだ一步も歩いていないのに、このまま倒れているわけにはいかない……

問10 傍線部(6)「その姿に思わず自分の身体を重ねてしまう」とあるが、なぜそのようなことが起こるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 〈ASIMO〉が歩いている途中で「おっとっと……」となりながら、必死にバランスを取ろうとする姿は、いかにも人間らしく、またひょうきんでもあり、わたしたちはそこに親しみを感じるから。
- ② 行為を自己完結におこなおうとするのではなく、〈グラウンディング〉を当てにしながら歩いて行く〈ASIMO〉を見ていると、わたしたちもまた、一人では何もできないことを思い知らされるから。
- ③ 前方に倒れそうになっても、どうにかして自分でバランスを保ちながら、慎重に一步一步を選択していく〈ASIMO〉の歩き方は、わたしたち人間の二足歩行をモデルに発想されたものであるから。
- ④ 動歩行モードをそなえた〈ASIMO〉は、不整地であっても地面からの反力を利用して上体のバランスを保ち、二足歩行を続けることができるが、それを可能にした身体的形状はわたしたちと瓜二つだから。
- ⑤ 倒立振子の原理で上体のバランスを取りながら歩いて行く〈ASIMO〉の姿は、外部の環境に対して開かれており、そのような身体のあり方は、歩いているときのわたしたちの姿と共通しているから。

問11 次に示すのは四人の生徒が本文を読んだ後に、その内容について話している場面である。空欄 甲・乙に入るものの組み合わせとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

生徒A——最近ではいろいろな場所でロボットを見かけるようになったけれど、〈ASIMO〉ってずいぶん前に登場したロボットだね。聞いた

ことはある。

生徒B——実際に見たことはなくても、本文を読めば、それが二足歩行ロボットということはあるよね。

生徒C——うん、それはわかるね。でも、一口に二足歩行ロボットと言っても、その歩き方のモードには違いがあるみたいだ。

生徒D——本文の表現を借りれば、〈ASIMO〉は 甲 みたいだよ。

生徒C——きっと、それが〈ASIMO〉らしきなんだろうね。ある意味、危なっかしいというか。

生徒A——でも、それって、わたしたちが歩くときもそうだよ。一步一步が独立しているわけではないでしょ。一連の動きとして歩くと、坂道を下るときなんかは特にそうだよ。

生徒B——たしかにね。そもそも、人間の行為全体がそうなんじゃないかな。

生徒D——どうということ？

生徒B——私たちの行為は 乙 ってことだよ。

生徒D——なるほど。たしかに人間は、何をするときも外の環境とかかわらざるをえないよね。

生徒A——そんなところまで〈ASIMO〉は人間に似ているんだね。ロボットを見る目が少し変わりそうな気がするよ。

① 甲 地面の〈グラウンディング〉を利用しながら一步をくりだす

乙 必ずしも投機的であるとは限らない

② 甲 〈静歩行〉と〈動歩行〉を状況によって使い分けることができる

乙 本質的に不安定なものである

③ 甲 〈委ね〉と〈支え〉のカップリングをうまく活用して歩く

乙 それだけで完結したものではない

④ 甲 ロボットとしてはじめて〈動歩行モード〉での歩行を実現した

乙 受動的であることを免れない

⑤ 甲 「一人で何とか……」という点には並々ならぬこだわりを見せる

乙 省力的であることを本質とする

II 次の文章を読んで、後の問1～問8に答えなさい。

いま「異文化理解」という問題を考えるとき、そこに(1) 基本的な二つの面があることに気づく。

一つは、近代世界が成立して以来、あらゆる文化は「近代化」の波を受けてきており、純粋な「異文化理解」の、ということは「近代化」の影響を被っていない「文化」どうしの間に成立するかもしれない「異文化理解」の存在は考え難いという面である。異文化は確かに存在するが、当対象とする異文化と自文化の間には「近代」が必ずといってよいほど存在するのである。もちろん、世界には依然として「近代」の届かない、あるいは「近代」から遮断された文化が存在することも考えられる。「近代」の届かない地域における異文化接触があり、そこに「異文化理解」が行なわれる可能性があることは否定できない。

A、いま「異文化理解」の問題をとらえるときには、一般的に「近代」を一方におかなくてはならない。「近代」は、もちろん、抽象的に存在するわけではない。西欧に発した「近代」は、その合理化、工業化、科学・技術化、民主化、市民化といったことの総体としての理念と生活様式となつて出現するが、それはまたキリスト教文化を背後にもつ西欧文明の拡張として非西欧世界にもたらされた。それは植民地化となつて現実化され、植民地社会の発展の中に現われることとなる。**B**、アジアにおいては、日本やタイやトルコのような例外はあつても、中国も含めて植民地的な影響の中で国と社会の発展を行なう以外になかった。「異文化理解」は、「近代」のこうした特徴によって刻印を打たれざるをえなかった。

そこでは(注1) エドワード・サイードの主張するような「オリエンタリズム」から、一九八〇年代のアメリカの(注2) リビジオニストたちの主張する「日本異質論」まで、西欧近代を価値の中心にする「異文化理解」が展開された。このことは逆にそうした西欧文化的な「異文化理解」に対する他の非西欧世界から西欧近代をみる「(注3) オクシデンタリズム」の発生も可能にする。オリエンタリズム的理解に対して対抗し批判することは、「近代」の影響を受けたところではどこでも何らかの形で起った。「異文化理解」における抑圧と反抗の応酬は、さまざまな変形を生みながらも、現在になお強く働く要因である。

さて、もう一つの面とは、「異文化理解」を純粋に人間の知覚・認知・知的作業としてとらえようとする「学問的」な面である。とくに文化人類学者のフィールドワークの作業も含めた異文化研究によつて活発になった研究領域である。

しかし、この後者の「異文化理解」といっても、それは近代科学(学問)によつて開発された領域にはちがいがなく、その理解のあり方にも「近代」の影響はしのびこんでいる。文化人類学における「ポストモダン」の運動の多くは、この「しのびこむ近代」をどうとらえるかを問題とし

ており、そこでは近代科学の土台から出てくる「異文化理解」の困難な問題が指摘されている。注意深い異文化の西欧研究者にも不可避免的にのびよるオリエンタリズム的異文化理解とオクシデンタリズム的自文化理解の「対照」であり、その記述における価値のおき方のありようとは別に、両者を理念的そして現実的対立としてとらえてしまう心性の傾向である。「西欧のイメージ」は、日本のマス・メディアに登場するコマーシャルの「白人」だけでなく、アルジェリアのイスラム社会を研究するフランスの社会学者の中にも生ずるのである。しかも、それはまさに「近代」としかいいようのない西欧文化のハイ・イメージ、あるいはステレオタイプ化された西欧に他ならない。だが、こうしたステレオタイプは、「近代化」された非西欧社会の研究者が異文化を研究するときにも現われないとは決していえないのではない。

「異文化理解」というとき、以上の二点から「近代」をどう位置づけるかという問題が大きく出てくる。これを避ける「異文化理解」論は、いまの時点では「現実」認識も「理念」構築も両者ともに不十分なアプローチとなるのではないかと思われる。

私自身、かつては「異文化理解」に関する文化人類学的な「文化内」的アプローチが可能に思えたときもあったが、それは多分に「異文化理解」の視点を無視する「文化論者」や「社会科学的研究」に対する反措定の意味をもっていた。この意味がいま大幅に減じたとは少しも考えていないが、今度は逆に文化人類学の言説における「近代」の問題化があまりにもわずかで、しかも強力な問題提起と意識されていないことが裏返しに明らかとなったといわざるをえないことに不満を覚えるのである。

世界の場合は、「文化の衝突」を基底においた政治的言説と行動が、いまや支配的となる様相すら示しはじめている。それに対しては、近年の経済的發展を背後に、「オクシデンタリズム」を陰画として発現させようとする政治的言説が出現してきている。「異文化理解」は、国際政治の支配的言説として、Xに使われるようになったといえるのではないだろうか。

こうした動きをよく見守りながら、このテーマは追究される必要があるのである。

「近代」が世界にもたらしたことの最大の要素は、普遍主義が存在するという政治的言説のもつ影響の大きさである。古代文明の誕生以来、文明は普遍的で、文化は個別的とでも総括できるような世界観は存在していたが（エジプト文明一元論や中華文明論をみるまでもなく）、西欧に発する「近代」は、その科学・技術の発達と合理主義、さらには人類救済宗教たるキリスト教的普遍主義によって、世界に大きな影響をおよぼした。植民地化という実体をともなった、この普遍主義の影響力は強大であり、「科学合理主義」はどこにでも適用されうる事物観であるという「常識」を成立させた。こうしたいわゆる「近代西欧文明」の性格についてはいまさら述べる必要はないとは思いますが、②「異文化理解」においてこの普遍主義は大きな意味をもつ。それは西欧的近代の事物観・世界観の中で異文化を「理解」という枠組を強固に設定したから

である。しかも、西欧近代の思想的なシンボルともみなされる^(注4) ルソーの「高貴な野蛮人」から^(注5) ヘーゲル、^(注6) マルクス、^(注7) エンゲルスの発展段階論、また「オリエンタリズム」の母胎ともいべきロマン主義的世界観などを経て^(注8) レヴィ・ストロースの「野生の思考」、という形でとらえられ、そこに明らかなように「異文化理解」の視点は、西欧近代の時代的变化に応じて変わるのである。ルソーの「高貴なる野蛮人」が「野蛮人」の現実の理解に基づくものではさらさらになく西欧近代社会の内部批判のための反措定的イメージとしてあったことを思うならば、「異文化理解」が一つの文明の中で時代的な変化に左右されることが解る^{わか}。それを「異文化理解」における「パラダイム」変化とよんでもよいが、西欧近代文明における矛盾と世界情勢の変化は当然のことながら、その普遍主義を揺るがすことになる。

相対主義は古代から存在してきた事物観にはちがいないが、二〇世紀に入ると文化相対主義として西欧近代的普遍主義批判の貌^{かお}をおびることになり、その背後には大きくいつて「近代」の影響の下で次第に発展してきた非西欧世界の新たな出現と、西欧近代社会（アメリカ合衆国も含めて）内部の矛盾（階級、人種・民族問題、政治・経済の弱化など）による「中心の喪失」現象がある。一九二〇年代から^(注10) フランツ・ポアズを中心とするアメリカ人類学において「文化相対主義」が出てくるが、それは西欧的近代の一元的支配に対する批判と異文化の「発見」による。この「発見」は北米インディアン^{（注11）}の文化など少数民族の「文化」の意味を新たに人類学的研究の中で見出し、その独自の価値を^{みいだ}擷^{すく}い上げて、文化の自律性を主張するものであった。それは^(注12) ミードのオセアニア研究のように「西欧の危機」が叫ばれる中での、新しい「楽園」の発見という「オリエンタリズム」も含んでいたが、人種差別などの社会的偏見を是正する方向も示していた。従来の西欧近代一元主義的「異文化理解」はその土台を揺るがされ、非西欧、非近代の各文化にも独立した個別的価値が存在するという個別主義的「異文化理解」の必要が説かれることになる。二〇世紀はまた相対的原理の発見の時代でもあり、「西欧の没落」がセンセーションを巻き起したのも第一次大戦によるヨーロッパの^(注12) ベル・エポックの崩壊をみた後である。

文化人類学においては、一九世紀の進化的文化理解はタイ^(ア)チヨウ^{チウ}として、文化相対主義的「異文化理解」が中心に位置するようになる。とはいっても、それはあくまでも西欧近代の「科学」的研究の中でのことであって、異文化理解の視点は変ったものの、その「枠組」が崩れ去ったことにはならない。

しかし、新たな異文化発見による個別主義が、機能主義や集合表象論や文化進化の多元性論や構造主義などのラベルを貼られようと、^(ア)「異文化理解」を大きく前進させたことは認めなくてはならないであろう。「フィールドワーク」による「異文化理解」も有効な方法として成立するようになった。フィールドワーク的「小世界」の文化の解読は精緻になされるようになったが、それはまた「小世界」から世界を^み視ることの限界

も教えるようになった。普遍主義と個別相対主義の対立は、決して解決されたわけではない。「小世界」の(1)「サイブ」が明らかになるにつれ、逆に「普遍的」なものを求める動きも出てこざるをえない筈である。^{はず}

しかし異文化はこの世界において平面上に等分に並べられて存在するわけではない。それは極度に屈折した形で凸凹の激しい起伏の中に(2)「チ」らばっているのであり、自然環境のみならず地域の時代変化によって変形を受けつつ存在するのである。相対主義的「異文化理解」は何よりもこうした状況においてなされねばならず、しかも、それは誰が誰に対して行なうものなのか、という問いを絶えず発せざるをなくさせる。研究者Ⅱ調査者の「主体」はどこにあるのかという問題も、研究者Ⅱ調査者のいる「Ⅰ」があつての「Ⅱ」研究である以上、不可避的に出てこざるをえない。支配―従属のステレオタイプをそこに当てはめることは当然可能と判断される。フィールドワークに従事する文化人類学者が、西欧近代への反措定として、また従来の実験観察的科学主義批判として提出した「原住民の視点」という「異文化理解」の視点も、それは「Ⅲ」向けの言説にしかすぎないとの批判が出されよう。民族誌的な「異文化理解」もオリエンタリズムの尖兵^{せんべい}のように位置づけられざるをえない面も明らかにされる。「原住民の視点」という「異文化理解」には、フィールドワーク的研究の可能にする「理解の仕方」という面の外に、明らかに西欧的ヒューマニズムによる人間理解と「Ⅳ」から「Ⅴ」を理解して「保護」という暗黙の「善き」了解事項を含んでいた。こうした視点のもつ意味は決して過小評価してはならないし、それをオリエンタリズム的偏向と一概に決めつけることも危険である。何故ならば、「異文化理解」という作業においては、どんな状況にあつても「主体」と「客体」とのずれは生ずるし、西欧近代の実体的な支配とその影響下にそれがなされてきたという「現実」においては、(3)「これ」の含む「批判」は十分に価値がある知的営為に相違なかったからである。しかも、現在にいたつても西欧近代―米国現代の「一元的視点」が多分に実体を喪失した仮構の形であつても強く政治的言説として主張されているのであり、「原住民の視点」を主張することは必ずしも容易ではない事態が生れているからである。この点はよく配慮されなければならない。

(青木保「異文化理解とコミュニケーション」(井上俊「他」編『他者・関係・コミュニケーション』所収) 岩波書店)

(注1) エドワード・サイード——パレスチナ系アメリカ人の文学研究者、文学批評家(一九三五—二〇〇三)。著書『オリエンタリズム』(一九七八年)において、西洋におけるアジアや中東への誤ったイメージが、欧米の植民地主義的、帝国主義的な野望を正当化してきたと主張した。

(注2) リビジオニスト——修正主義者。ここでは、アメリカの対日政策見直し論者のことを指す。

(注3) オクシデンタリズム——反西洋思想。

(注4) ルソー——フランスの哲学者、思想家(一七二一—一七七八)。ルソーの性善説にもとづく人間観は、人間は生まれながらに善であるという思想を体现した「高貴な野蛮人」に通ずるところがある。

(注5) ヘーゲル——ドイツの哲学者(一七七〇—一八三一)。

(注6) マルクス——ドイツの哲学者、経済学者、革命家(一八一八—一八八三)。

(注7) エンゲルス——ドイツの思想家・革命家(一八二〇—一八九五)。

(注8) レヴィルブルユル——フランスの哲学者・社会学者・文化人類学者(一八五七—一九三九)。

(注9) レヴィリストロース——フランスの社会人類学者、民族学者(一九〇八—二〇〇九)。

(注10) フランツ・ボアズ——ドイツ出身のアメリカの人類学者(一八五八—一九四二)。

(注11) ミード——アメリカの文化人類学者(一九〇一—一九七八)。

(注12) ベル・エポック——主に一九世紀末から第一次世界大戦までの、パリが繁栄した華やかな時代を指す言葉。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

 ～

3

。

(ア) タイチヨウ

1

- ① 回復のヨチヨウがある。
- ② チヨウメイな音を奏でる。
- ③ 相手をチヨウハツする。
- ④ チヨウイが上昇する。
- ⑤ 制限時間をチヨウカする。

(イ) サイブ

2

- ① 新人をサイヨウする。
- ② ジョサイなく振る舞う。
- ③ 劇団をシュサイする。
- ④ 最新機能をトウサイする。
- ⑤ 精巧なサイクを施す。

(ウ) チラばって

3

- ① 申し出にサンドウする。
- ② 想定外の大サンジになる。
- ③ サンザンな目に遭う。
- ④ 世のシンサンをなめる
- ⑤ 子のためにシサンを残す。

問 2 空欄 A・B を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A・4、B・5。

- ① ましてや ② むしろ ③ たとえば ④ さらに ⑤ しかし

問 3 傍線部(1)「基本的な二つの面」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① いま「異文化理解」という問題を考えるとき、基本的にはその対象が近代化の影響をまったく受けていないということはありえず、さらに、学問的に異文化をとらえようとしても、その立脚点がすでに近代化されてしまっているということ。
- ② いま「異文化理解」という問題を考えるとき、第一義的には近代世界からは隔絶された文化の間における異文化理解が存在するが、それと同時に、近代化の影響を少なからず受けた文化の間における異文化理解もまた存在するということ。
- ③ いま「異文化理解」という問題を考えるとき、西欧近代を価値の中心として非西欧世界を理解しようとする、オリエンタリズム的な理解がまずある一方で、それに対して批判的なオクシデンタリズム的な理解もありうるということ。
- ④ いま「異文化理解」という問題を考えるとき、一般的には近代世界を前提とした異文化理解のあり方を認めざるをえない状況があるが、それに対して文化人類学者からは、文化内的アプローチを重視するべきだという批判が起きているということ。
- ⑤ いま「異文化理解」という問題を考えるとき、オリエンタリズムや日本異質論のような極端な形の異文化理解が存在することは否定できないが、その一方で、学問領域では価値中立的に異文化をとらえる試みもなされているということ。

問 4 空欄 X を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 段階的
② 一義的
③ 建設的

- ④ 逆説的
⑤ 古典的

問 5 傍線部(2)「『異文化理解』においてこの普遍主義は大きな意味をもつ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 西欧的な「楽園」を世界的に拡大しようとする普遍主義は、「異文化理解」における抑圧と反抗の応酬を生むこととなったから。
② 西欧に由来する普遍主義こそが、西欧的近代の事物観や世界観を基本的な枠組とした「異文化理解」を生み出す原因となったから。
③ 西欧近代の思想を世界化しようとする普遍主義は、西欧による差別的、抑圧的な「異文化理解」をより強固なものにしたから。
④ 西欧に端を発する普遍主義は、「異文化理解」のあり方をゆがめ、その反動として文化相対主義の台頭を許すことになったから。
⑤ 西欧近代一元主義からの脱却を目指す普遍主義は、「異文化理解」を合理的かつ客観的なものへと変える契機となったから。

問 6 空欄 I V を補うのに最も適当な言葉の組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|---|-----|
| ① | I | 大世界 | II | 小世界 | III | 大世界 | IV | 大世界 | V | 小世界 |
| ② | I | 大世界 | II | 小世界 | III | 小世界 | IV | 大世界 | V | 小世界 |
| ③ | I | 大世界 | II | 大世界 | III | 小世界 | IV | 大世界 | V | 大世界 |
| ④ | I | 小世界 | II | 大世界 | III | 小世界 | IV | 小世界 | V | 大世界 |
| ⑤ | I | 小世界 | II | 大世界 | III | 大世界 | IV | 小世界 | V | 大世界 |

問 7 傍線部(3)「これ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① フィールドワークに従事する文化人類学者

- ② オリエンタリズムの尖兵
- ③ 「原住民の視点」という「異文化理解」
- ④ 暗黙の「善き」了解事項
- ⑤ 西欧近代の実体的な支配とその影響

問 8 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。 解答番号は 11

ア 15

ア 相対主義そのものは決して新しい事物観ではないが、二〇世紀に起こった文化相対主義の背景には、西欧世界の凋落と非西欧世界の台頭がある。それは文化人類学にも影響を与え、「異文化理解」における個別主義を生み出すことになったと考えられる。 11

イ 「異文化理解」を無視するような学問的傾向に対しては、「小世界」の文化内部における文化人類学的なアプローチの必要性を訴えることの意義はたしかにある。しかし、非西欧世界における文化の近代化の問題が等閑視されるようなこともあつてはならない。 12

ウ 現在では西欧からの影響をまったく受けていない文化などありえず、純粋に異文化を理解するということは原理的に不可能になってしまった。そのような状況を前提としたうえで、将来的には西欧の文明と非西欧の文化の共存を図っていく必要がある。 13

エ 西欧近代から米国現代へと継承された一元的な普遍主義は、今でも実体的な支配をとまなう形で機能している。そのような状況を踏まえるならば、それらに対する批判的な言説として「原住民の視点」を主張することの意義は、これまで以上に高まっている。 14

オ あらゆる文化は、この世界においてさまざまな形態をとりながらも、それぞれが独自の価値をもつて存在している。しかし、「高貴なる野蛮人」や「野生の思考」といった表現は、非西欧の文化の価値を無視し、おとしめるものであり、許容することはできない。 15

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

声、本、新聞、映画、ラジオ、テレビ、インターネットもすべてをメディアと(ア)総称するようになり、メディアという一般概念の下位分類として、口承的メディア、書記メディア、活字メディア、映像メディア、電子メディアなどという名前で、それぞれが呼ばれるようになったのは比較的最近のことです。さまざまなメディアが共存する、あるいはAする時代を、私たちが生きていることをそれは端的に示すものです。どのようにして複数メディアの時代を私たちは生きるようになったのか、そのことは私たちの文化をどのように特徴づけ、私たちの社会のどのような成立条件をつくりだしているのかを考えてみなければなりません。そのとき私たちは「記号」と「技術」という人間存在の二つの次元が接するところに広がる問題圏を見いだすことになります。

まずそもそも「技術(テクニク)」とは何でしょうか？ (イ)技術の例として道具の使用ということを考えてみましょう。スタンレー・キューブリック監督のSF映画『2001年宇宙の旅』の始まりを思いだしてみてください。「人類のあけぼの」と題された冒頭では、動物の骨を棍棒こんぼうとして使用する類人猿たちが道具を使わない他のグループをBする場面が映しだされます。道具の使用が人類の始まりというわけですが、つづいて上空に投げ上げられた動物の骨はすぐに宇宙空間を航行するロケットの姿に変わります。道具の使用に始まる技術の歴史が行きついたのが近未来の宇宙航行のテクノロジーであることを映画は示しているわけです。

じつさい道具の発生は、類人猿や猿人類における直立歩行と関係しています。先史学者の(注1)アンドレ・ルロワグーランがいうように、動物の形態進化の観点からいえば、人間の祖先において直立歩行は手を解放すると同時に、脳を発達させる結果を生みました。直立することによって前足は歩行という機能から解放されて手となり、身振りが可能になります。頭は地から離れ、脳頭蓋は鼻面との密着から解放されて容積が局大化します。ルロワグーランによれば、これが「人類」を生み出した手と脳の解放という進化史上の出来事です。【①】手の進化がもたらすのが「技術」であり、脳の発達をもたらすのが「言語」です。私たちが考えようとしている問題との関わりでいえば、手と身振りの解放につらなるのが技術ぎじゆつの次元じげんであり、脳の解放につらなるのが記号きごうの次元じげんです。

旧石器時代における石斧せきふという道具の使用を考えてみましょう。【②】この道具の発生は、人間の身体が獲物としての対象に働きかけるときに、身体の働きの延長となる人工器官が生み出したことを意味しています。道具という人工器官は、身体の代わりという意味では身体の拡張を意味しますが、それだけではありません。【③】石斧であれば、獲物の捕獲という用途のために使用されるという、身振りとは対象との関係が道具を通して予め指定されるということが起こってきます。人工器官(英語 *prosthesis*、仏語 *prothèse*、語源はラテン語 *prothesis*「前二

立テル」は、人間の身体のじつさいの所作に先立って、対象を予め前に (pro-) 定立する (thesis) という役割を果たすのです。このような動作の指定および対象の前―定立 (pro-thesis) は、道具を通して反復されることとなります。つまり、道具は用途を指定して身振りの反復を導き入れ、同時にその対象を予め定めることになる。X、その使用によって別の個体も技術がつくりだす環境の中に導き入れられます。道具の使用はこのように人間と自然との関係を集団的に決定づけることとなります。

ヒトは自然の前に裸で投げだされているわけではなく、まず技術がつくりだす環境の中に生まれます。技術は基本的に集団的で次々と付け加えられていくもので、技術的発明は伝承されていきます。④ ⑤ またそれゆえに、革新されたり淘汰されたりするものです。⑥ ドウブレの引用がいうように、技術は遺伝子プログラムにもとづく生得的なものではなく、伝承され後天的にCされるものであるということが重要です。旧石器時代における石斧に見られるように、道具使用は道具をつくりだす技術の伝承を必然的にもたないます。この伝承は遺伝子プログラムによるのではなく、「文化 (culture)」と呼ばれるべきものです。⑦ ⑧ そして、民族 (ethnicity) を特徴づけるのは人種ではなく技術の伝承にもとづいた固有の文化と言えます。

メディアの成立は「技術の問題」と直接結びついています。物質を變形する技術は、物質と記号の次元からなるメディアの成立にとって内在的な役割を果たしているからです。それぞれの社会は自らの技術の水準に応じた違ったやり方で、メディアをつくりだします。例えば、石に文字や絵を記入する技術、紙を製造する技術、大量に印刷物をつくりだす技術、映像を再生する技術、シリコンチップを人工言語の記号列を記入する表面に変える技術など、技術は記号を書き込む物質的支えのあり方をさまざまに変化させてきたのです。この変化に応じて記号活動を担う人間の身体と精神のあり方が変化してきました。⑨ 「人間」の「前―定立」のあり方が歴史的に變容してきたのです。

二〇世紀後半、とくに一九五〇年代にテレビを中心にメディア革命が起こったとき、これにいち早く反応して独自の理論を提起したのはカナダのメディア理論家マーシャル・マクルーハンでした。そのマクルーハンによるメディアの定義は、「メディアは人間の身体の拡張である」という考えでした。

たしかに、メディアは、記号活動を行う身体の活動範囲を拡張します。視る・聴く・話す・書くといった記号活動は、写真や映画やテレビ、ラジオや録音機器、電話やその他の通信技術、紙とインクや活版印刷、電子メディアなどのメディア技術によって延長され、それにもなつて人間の記号的身体も拡張されていきます。生身の人間の視るといふ記号活動を担う眼は、例えば、写真や映画やテレビなどの視覚メディアによって拡張されます。Yでは視られなかった大きな規模、あるいは大きな精度において視るといふ記号活動が成立することになります。人

間の眼では見ることでなかった範囲まで、記号的身体としての「視る身体」は拡張したというわけです。じっさい私たちはテレビの画面を通して、何万キロも離れた地点で起こっている出来事を(イ)即座に「視る」ことができます。「話す」という記号活動についても同じことが言えます。電話というメディア技術は「話す」という記号活動の範囲を飛躍的に拡大し、声の届く範囲内で成立していた「話す」という活動の成立の条件を全面的に変えてしまいました。この場合も、電話は、「話す身体」の拡張であると考えることが出来るわけです。

マクルーハンは、「メディアは人間の身体の拡張である」という定式化を行ったのですが、その考え方の基礎にあるのは、それぞれの文明を特徴づける「感覚比率 (ratio sensorium)」という考えでした。人間は、五感を通して経験を構成しているのですが、マクルーハンの「身体拡張」の定義を適用するならば、(3)どのようなメディアを通して人間の経験が構成されるのかに依拠して、拡張される感覚の間の配分が異なることになる。例えば、口承によるメディアに多くを負っている文化においては、聴覚に重きがおかれるのに対して、活版印刷術が発達させた黙読の文化においては視覚に重点がおかれるようになるという具合です。メディア技術の変化は、メディアが延長する感覚の間の比率を変化させ、それにしたがって発達する文明のあり方が違ってくるという考え方なのです。これをマクルーハンはそれぞれの文明における感覚比率という概念で説明しようとしたのです。

以上は、身体および感覚の拡張という観点からのメディア理解です。技術がもたらす人工器官が身体を拡張し、文化を特徴づける感覚モード間の比率を変化させるというわけです。ただ、技術がこのような身体拡張の側面をもつことは間違いないのですが、メディア技術が行うのはそれだけではありません。というのもメディアは身体の延長だけではなく脳の延長、という側面を(エ)際だつた特徴として備えているからです。メディアが技術によって変形された物質のエレメントであるだけでなく、記号が書き込まれる支えであるということは、メディアが記号という脳の活動の外在化の場所になっていることを意味しています。紙の上に文字で記録するということを考えれば、紙と文字というメディアは脳の働きとしての記憶を延長していることとなります。私たちが手紙や本を読むことで他の人の思念を辿たどることが出来るのも、書き手の脳の働きが文字としてのメディアに延長されたからです。本とはその意味で脳の拡張であり、(4)図書館とは世界の記憶の外在化であると言うこともできます。さらにコンピュータは脳をモデルとした計算能力の拡張であり、人工知能は知性の働きそのものを外在化する試みでもあります。

郵便や新聞やテレビのような通信技術を念頭に置いて、メディアは記号の伝達を行う技術として考えられる傾向がありました。脳の延長、としてのメディア技術の延長としてメディア技術を捉えるなら、文字の発明からコンピュータにいたるまですべてのメディアの発達は、脳の延長、としてのメディア技術の歴史として捉えることができるはずです。『2001年宇宙の旅』に話を戻すと、道具が使用された瞬間に宇宙船が発明されたのと同じよう

に、⁽⁵⁾ 人類によって初めて文字が書き記された瞬間に原理的にはコンピュータは発明されていたということができるとです。ルロワ＝グーランの先史学との関連でいえば、人類を生みだしたのが手の解放（＝技術の発生）と脳の解放（＝言語の発生）であるとするれば、文字の発明はそれら手の進化（＝技術発達の系譜）と脳の進化（＝記号発達の系譜）とが最初に出会う記号技術の発生の出来事であり、手の進化と脳の進化との D が行きついた地点に『2001年』の宇宙船とそれを統御する^(注3) コンピュータHALが生みだされたということができません。

（石田英敬『記号論講義 日常生活批判のためのレッスン』筑摩書房）

（注1）アンドレ・ルロワ＝グーラン——フランスの先史学者、社会文化人類学者（一九一一—一九八六）。

（注2）ドゥブレ——フランスの作家、哲学者、評論家、政治活動家（一九四〇—）。

（注3）コンピュータHAL——『2001年宇宙の旅』に登場する架空のコンピュータ。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

1

 ～

3

。

(ア) 総称する

1

- ① ひとまとめにして呼ぶ
- ② わかりやすい名前を付ける
- ③ 一体化したものとみなす
- ④ とりあえずは理解する
- ⑤ ざくばらんに表現する

(イ) 即座に

2

- ① あからさまに
- ② その場ですぐに
- ③ 順番通りに
- ④ ありのままに
- ⑤ 遠慮せず気軽に

(ウ) 際だった

3

- ① 他に引けを取らない
- ② 予想を上まわる
- ③ ひとときわ目につく
- ④ ほかに類のない
- ⑤ よく知られている

問 2 空欄 A 〓 D を補うのに最も適当な言葉を、次の①〓⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は A・4、B・5、C・6、D・7。

- ① 駆逐 ② 競合 ③ 習得 ④ 陶冶 ⑤ 合流

問 3 傍線部(1)「技術の例として道具の使用ということを考えてみましょう」とあるが、道具についての説明として最も適当なものを、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 道具を製作する技術は集団の中で伝承され更新されるが、淘汰されることもある。
② 石斧のような道具は人間の記号活動を拡大し、感覚比率を大きく変化させる。
③ 人工器官としての道具は、身体の代わりとして機能し、人間に自由をもたらす。
④ 道具の使用目的と使用方法は、使用者の身体的な条件によって規定される。
⑤ それぞれの社会は自らのもつ技術水準に応じて、必要とする道具を作り出す。

問 4 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 道具の使用目的は徐々に当初予定されていたものから離れていき
② 道具は個々人がそれぞれの目的のために使用するものとされ
③ 道具の使用方法はやがて次の世代へと受け継がれるようになり
④ 道具を使うためには専門的な技術が必要とされるようになり
⑤ 道具はそれをつくりだした個体でなくても使用することができ

問 5 傍線部(2)「『人間』の『前―定立』のあり方が歴史的に変容してきた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① どのような物質をメディアとするかは、その社会の技術水準によって大きく左右されるが、これまでの歴史の中でメディアの使用目的を変化させてきたのは、むしろ人間であったということ。

② 人間が何を記号として扱うかは、その社会の「技術の問題」と直結し、技術こそが記号のあり方を規定するので、技術の歴史的な変遷にしたがって、記号の形や内容もまた変わってきたということ。

③ メディアの様態は、その社会の技術水準にもとづいて決定されるため、技術が変わればメディアも変わり、その使用目的も変わるといふことが、歴史の中で繰り返されてきたということ。

④ 記号が書き込まれるメディアの物質的なあり方は、その社会の技術水準によって規定され、またそれにしたがって、メディアを使用する人間の心身のありようも歴史的に変化してきたということ。

⑤ 物質と記号からなるメディアが成立するためには、その社会の技術が一定の水準に達していなければならないが、歴史上、その技術を生み出し、発展させてきたのは人間であったということ。

問 6 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① 白眼
- ② 肉眼
- ③ 一眼
- ④ 主眼
- ⑤ 心眼

問 7 傍線部(3) 「どのようなメディアを通して人間の経験が構成されるのかに応じて、拡張される感覚の間の配分が異なることになる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① 人間の経験はメディアを通じて形成されるが、そのメディアが人間の五感のうちどれに価値を置くかは一様ではないということ。
- ② 人間の経験がどのようなメディアに依存し、成立しているかによって、五感のうちで重視される感覚も変わってくるということ。
- ③ 人間の経験をいかなるメディアが形づくるかということは、その文化が人間のどの感覚を重視しているかによって決まるということ。
- ④ 人間の経験にどのようなメディアが関係してくるかという点を考慮しながら、私たちは自分の感覚をうまく使い分けているということ。
- ⑤ 人間の経験を構成するメディアは、文化によってさまざまであるが、その違いは「感覚比率」の違いによって生じるということ。

問 8 傍線部(4)「図書館とは世界の記憶の外在化である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 記号の伝達を行うメディアは、人間の脳の活動である記憶を延長し、外部化したものであるといえる。図書館はそうしたメディアである本を収集し、世界に向けて公開しているという意味で、記憶を外在化する場所であるということ。

- ② かつてメディアは、視る・聴く・話す・書くといった記号活動を拡張し、人間は本を通して世界中のことを知ることとなった。そのような意味で、図書館とは人間が経験することのできる世界を広げ、外在化させる場所であるということ。

- ③ メディアは人間の身体の活動範囲を延長する一方で、そこにしるされた記号は脳の働きである記憶を延長するものであり、本はそのようなメディアの一つである。その意味で、図書館は世界の人びとの記憶が外在化されている場所であるということ。

- ④ 技術が作り出した人工器官であるメディアに記録された記号は、人間の脳の働きを補い、代替するまでになった。そのようなメディアである本を収める図書館は、ある意味で世界中の人間の脳の働きを可視化し、外在化する場所であるということ。

- ⑤ 物質的なメディアにしるされた記号は、人間が記憶することのできる範囲を拡張し、記憶を固定化することを可能にした。そうしたメディアである本を世界中から寄せ集める図書館は、人間の記憶が外在化されている場所であるということ。

問 9 傍線部(5)「人類によって初めて文字が書き記された瞬間に原理的にはコンピュータは発明されていたということができる」とあるが、

なぜそのようにいえるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 手の解放によって誕生した文字は人類史上最も原初的なメディアであり、その延長としてコンピュータがあるから。
- ② 言語の延長線上にある文字と、技術の延長線上にあるコンピュータは、ともに二足歩行の開始を契機としているから。
- ③ 文字とコンピュータは、程度の差はあるものの、ともに脳の記号活動が技術によって拡張されたものであるから。
- ④ 人間の脳の延長として生み出された文字が、技術的なメディアと出会うことにより、コンピュータは生まれたから。
- ⑤ コンピュータで使用される文字は、人類が技術をもつてから初めて発明した文字に端を発するものであるから。

問 10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。 解答番号は 15。

【道具は用途を指定します。】

問 11 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。 解答番号は 16。

ア 20。

ア 物質を変形する技術は、その時代の社会が何をメディアとするかという点において内在的な条件となり、また、メディアのあり方に応じて、人間の身体と精神もまた変化するということが、歴史上繰り返されてきた。

イ 旧石器時代の石斧という道具は、ある意味、人間の身体の働きを延長する人工器官であるということができるが、その用途は人間が主体的に決めるのではなく、じっさいの身体所作に先立って決まっている。

ウ メディアという言葉は、人類史上登場したさまざまな口承的メディア、書記メディア、活字メディア、映像メディア、電子メディアに対する上位概念として比較的最近生まれ、使われるようになった。

エ 映画『2001年宇宙の旅』に登場するコンピュータHALによって象徴されているのは、道具の使用の開始はまさに「人類のあけぼの」であり、また、その発達は日進月歩のものであるということである。

オ マクルーハンによれば、「メディアは人間の身体の拡張である」と定義されるが、そのような定式化は、メディア技術の変化に伴う感覚比率の変化と文明の発達のある方には関わりがあるという発想にもとづく。

20

19

18

17

16

